

サッカレイの門出および試練

梅宮 創造

概要

本稿では若きサッカレイの生活模様に主眼を置く。チャータハウス校を出てケンブリッジ大学に入り、その後の精神放浪、結婚、家庭、妻の発狂、等々、サッカレイのくぐり抜けた甘い辛い経験を凝視してみたい。そこから何が生れるか。作家誕生の過程が、作品制作の秘密が、そして何よりも、サッカレイなる人物の体温が直かに感じられるものなら喜ばしい。たび重なる苦難の日々に悲哀となり夢となり、陰に陽に現れている彼の素顔、それを明らかにすることが当面の仕事である。サッカレイ文学の深い理解のためにも、欠かすべからざる仕事であろう。

大作『虚栄の市』に至るまでの道程は生易しいものではない。サッカレイはひととき画家を志し、新聞記事を書き、小説を試みては批評文を物すなどした。その下積みは何年も続いた。剩え、サッカレイには生活の不如意が、家庭の悩みが絶えなかった。それやこれやが彼を鍛え、文章に磨きをかけ、結果としてはその作品が類稀なる光芒を放つに至った。しかし、これが彼自身にとって仕合せな結果であったか否か、判らない。

後世の我々は遺された作品を読み、手紙や日記を検め、さらに夥しい証言や伝記の類に眼を通すばかりである。そうして一作家の像を心中にふかく刻み、末永く、個人の大切な所有物として蔵って置こうとする。それで良いのだろうかと思う。

もとより文学は他人に押付けるものではない。他人を説得するものでもない。文学研究上の「新発見」などにせよ、多くは既に発見された真実の「再発見」であろう。何故なら、文学における真実とは、幾度も幾度も重ねて発見されるべきものであり、一個の動かぬ力を揮って人を黙らせる代物ではない筈だから。

サッカレイの継父カーマイクル・スミス少佐はインドから帰国して、翌年、サリイ州アデイス・コムの陸軍学校管理職に就いた。サッカレイ少年がチャータハウス校に入った年の夏のことである。しかし継父はこの職を二年足らずで辞めて、何を思ったものか、ほどなく夫婦打ち揃って田舎へ引込んでしまった。デヴォン州はオタリ・セント・メアリの北方一・五マイルの地、人里寂しいラークベアの鄙に家を借りて鋤鋤の仕事に転じたのである。齢まだ四十代半ばにして隠居もあるまいと思われるが、一方、サッカレイの母親となると、三十を越すこと僅か数年、持前の容姿端麗に女盛りの魅力までが加って遍く村人達の注目を浴びた。ラークベアに於けるこの夫婦の新生活とはどんなであつたろう。愛息は遠くロンドンに下宿して彼等の側にはいない。

ラークベアの家にはサッカレイよりも四つ年下の従妹メアリ・グレアムが同居した。早々に両親を失ってしまった気の毒な娘であるが、孤児となった日から、カーマイクル・スミス夫妻が彼女の養育を引受け、実子さながらに可愛がった。子供好きの夫婦としてはメアリの日々の成長が生活の張りともなっていた筈である。サッカレイもまたメア리를実の妹のように遇して、後年、『ペンデニス』作中に彼女の面影を偲んでローラ・ベルなる乙女を描いた。

また、ほかにラークベアの家に入居した幼い娘があり、こちらは後にブラザトン夫人となって、サッカレイの長女リッチイ夫人宛に昔日の思い出の断片を書き伝えている。リッチイ夫人の紹介文を含めてここに引用して置く。

「ラークベアへの道は広いロンドン街道から枝分れして——」とブラザトン夫人が書いている。「やがて、樺の枝葉の弓なりに茂る美しい並木道となります。道を半分ほど過ぎた所に池があり——とてもきれいな、寂しい池があり——その周囲を木々が取巻き、木蔭をつくり、池のなかには緑の小島が、水面には朽ちた古い舟が浮んでおりました。……」家には馬小屋と納屋を備えた中庭があり、そこから緑色の扉を押して芝生に出ることが出来たそうである。

「あのでこぼこの芝生を想うにつけ、」とブラザトン夫人は続ける。「そして、あらせいとうだのカーネーションの簡素な花壇を想えば、静かなる夏の夕べ、あなたのお祖母さまが佇んで——背の高い、堂々として品のあるお祖母さまが——美しい灰色の眼を大きく見開いて夕陽の沈むのをご覧になっている、あのお姿がいつも眼に浮びます。……」

サッカレイは学校が休暇に入ってからラークベアの親許へ帰る日を待ちに待った。学校が大嫌いで、それにまた、母親を慕う気持が尋常ではなかったのである。『ペンデニス』中のフェアオークスは即ちサッカレイ少年の眼窩に宿せるラークベアであり、ここでは在りし日々の風景と、母子の心の緊密な繋りとが精妙に重なり合って一片の詩情を醸し出している。

——フェアオークスの芝生を下ればブロールの小川に至る。反対側には森や植込み（殆ど茂るがまま）があつて、そこは准男爵サー・フランシス・クラヴァリングの屋敷クラヴァリング・パークであつた。私園はそのまま草原へと続き、ペンデニス一家がフェアオークスに移り住んだ当初には牛や羊が草を食んでいた。——（中略）——日没どきに、フェアオークスの芝生から眺める風景は佳かつた。芝生と、その向いのクラヴァリング・パークとは二つながら贅沢な黄金色に包まれ、いかにも鮮やかであつた。邸の階上の窓という窓が一斉に燃え立ち、見る者の眼を驚かす。小川はさらさらと西方へ流れ、果ては鬱蒼たる森の奥へと消え、その背後に、クラヴァリングの古刹の塔が（故に町はクラヴァリング・セント・メアリズと称ばれて今日に至る）、今や紫色に耀きわたる。そんな折に、アーサ少年と母親の姿が長い青い影を草原に投げ掛け、少年はときに声を落して或る一節を繰返すのであつた（母親譲りの多感ゆえ、大自然の美がいつも少年の心を動かすのだ）。「此はそなたの耀ける御作なり、善を生み給いし母よ、全能の神よ！ 此はそなたの物、この世の礎なり」これにはペンデニス夫人も感動を抑えきれない。このような散歩やら会話は、いつもながら、親を慕い子を愛す双方の心ゆくまでの抱擁を以て締括られるのであつた。それというのも、愛情と祈りを捧げるのがこの夫人の主なる日課なのであり、一方、ペンデニス君の側も、しばしば激してこんなふうな口走るのを作者は耳にしたものだ。——僕はきつと天国へ行くぞ。だって、お母さんは天国で僕がいなくちゃやりきれないだろうから。」

母子の堅い絆はこんな具合に描かれるが、これに続いて、アーサ・ペンデニスの父親に関する叙述が見えるので、それも併せて引用して置く。サッカレイの継父の、ラークベアでの日常をそれとなく想わしむる件りである。

ジョン・ペンデニスと云えば、一家の長とか何やらで誰しもあらん限りの敬意を表していた。彼の云いつけは、まるで変更を許さぬ制度のようにきちんと守られた。その帽子はおそらく国中の誰の帽子よりも丹念に塵が払われていた。毎日の食事ともなると、一分の狂いもなく用意され、もしも後れて食卓に就く者があれば、——例えばだらないペン坊やがときどきそうであつたが——ああ、禍なる哉、である。それから祈りが唱えられ、手紙が読まれ、用件が発せられる。主人は馬小屋と庭を覗き、鶏小屋に犬小屋、また納屋と豚小屋にも足を運ぶ。これらは毎度決つた刻限に実行されるのである。夕飯が済めば、彼はいつも膝の上にグロブ紙をひろげ、顔に黄色い絞り染めのハンカチをかけて居眠りをする（弟のペンデニス少佐がその黄色いハンカチをインドから送ってくれて、兄貴のほうは少佐の階級を買い取るのに援助してやったものだ。今では兄弟仲、頗る良好である）。さて、夕食は六時かつきりに喫せられ、前述した日没時のいきさつは、多分、七時半頃のことであつたかと思われるが、芝生に面した窓からの眺めなんぞに主人はどれほど関心を傾けたろう。そちらで盛り上っている詩

だの抱擁には、とんと共感を覚えなかったものと見える。⁽³⁾

ラークベアの空気は『ペンデニス』の初めの数章にしめやかに感じられる。この地でカーマイクル・スミス夫妻は十年の歳月を送るが、この間、サッカレイとしては最も多感な青年期を歩んでいたのである。

サッカレイは一八二八年四月にチャータハウス校を出て、暫くラークベアの親許に寛いだ。そのあとはケンブリッジ大学に入る予定であったが、五月から六月にかけて、ラークベアの家にてひどい病に罹ってしまった。何の病であったものやら詳らかではないが、頭髪をきれいに剃ったと云うから、とんでもない病に違いない。そのため九月の進学は諦めて、いざケンブリッジのトリニティ学寮へ赴いたのは翌年二月のことであった。

『ペンデニス』の主人公がオックスブリッジに入学して、不幸にも落第学生となって大学を去るあたり、作者その人の苦い経験を写していると云えなくもないが、しかしサッカレイの大学生活の仔細が忠実に『ペンデニス』章中に復元されているかとなると話は別である。第一、若きペンデニスは、性格にせよ素行にせよ、果してそのまま当時のサッカレイであろうか。

この最も自伝に近い小説は、『デヴィッド・コバフィールド』の作者の筆さばきとは大いに異って、感情が制御され、色彩が弱められ、個人体験の奥処は能うかぎり淡くばかされている。読者はそこに暗示された「真実」を読み取らねばならない。

作品の生命とは何か、とサッカレイは考える。自身の体験に語るべき「感情」が認められるなら、それを書くのに愕る必要もあるまい、——若きペンデニスがウォリントンに向ってこんな意見を吐く。書いた物が十年して、さながら安物のワインのように、「栓を開けてみれば嘗ての芳香は消え味もまた無し」との仕儀に立ち至るかも知れない。否、応々にして個人の体験とはいずれ安物のワインのごとき代物であろう。それもまた已むを得ない。問題はその先である。文学の目利きウォリントンがペンデニスにこう忠告する。

——今度休暇で帰省する折には、君の「ウォルター・ロレイヌ」を布靴に入れて持つて行くんだね。そいつにもっと現代風の香りを付けてやることだ。青臭い章句をとどころ切り落して——と云ってもぼつさりやつては不可ない。それに少々可笑し味とか、陽気なところ、皮肉などの類を加えて、そのあと市場へ持出して売ってやろうじゃないか。⁽⁴⁾

ペンデニスは云われた通りに作品の書き直しをするが、このウォリントンの忠告は、作者自身の自作に寄せる批評とも取れる。⁽⁵⁾個人の体験を扱うのに、生のままでは要するに「青臭い」のである。材料には程々に手を加えて工夫を凝らさねばならない。そこではじめて作品が作品として生命を持つ。

しかしそれだけのことであろうか。「工夫」と云い、「作品の生命」と

云うが、ここに時代の趣味とか制約が意識されていない筈はない。『ペンデニス』序文には作者の苦渋のほどがありありと窺えるのである。本当に書きたいことを、現代の青年像を、何故ありのまま正直に描けないのか。何故、フィールディングのごとき闊達な筆はもはや許されないのか。サッカレイは序文の末尾に力説する。「世に認められているよりもやや率直に、この作品を書いてみた。……真実とは必ずしも快いものではないが、ともあれ、真実こそ最善のものである」

フィールディングの筆を羨み、現代の偽善の強いる制約を恨む気持は、既に十年前、一八四〇年九月二日『タイムズ』紙上に載せた「フィールディング評」にも現れている。サッカレイには確かに書きたいものがあつた。それと同時に、時代の壁がいつも痛感された。彼の表現は二者の中道に就かざるを得ない。ペンデニスとウォリントン、両方の感慨を併せて、結果としてペンデニスの採つた道、つまり妥協の道をサッカレイもまた採らざるを得なかつた。

サッカレイの大学時代の実情については、小説『ペンデニス』の前にまず母宛の詳しい手紙が能弁に語っている。とりわけ初めの数箇月、まるで日記でも付けるように毎日の様子を具さに綴つて母親に報告しているのが興味深い。親戚の家に招ばれてお茶を喫んだとか、乗馬や散歩の話、ワイン・パーティの件、早朝から個人教授を受けたこと、弁論クラブでの話、友人との付き合い、試験勉強やら成績について、等々、実に小まめに書き送っている。サッカレイの大学生活の滑り出しは快調であつた。手紙の随所に、ひどく力の漲つた、頗る真面目な彼の横顔が見える

のである。

四月十三日、月曜日——記録をまた始めることにします。この部屋で十人から成る食事を開きましたが、今回は僕の主催ではありません。以前、六人を招んだことがあつて、それはまあ小さな会でした。スープ、公魚、舌平目、七面鳥の蒸焼、羊の腰肉、鴨、クリーム・ゼリ、その他が並んで、今度の会はヘイルストンなる頗る付きの勉強家によるものです。僕は今朝、七時半から一時まで古典を読み、そのあとヒュームの随筆を読みました。ヒュームは文章そのものより議論がとても面白く思われます。ところで、エッセイ・クラブを作ろうと考えているのですが、仲間はブロウム、ムーディ、ヤングと僕の四人きりで、いずれもチャータハウス校出身です。チャータハウスはこれでもう沢山です。仲間が十人に殖えれば、年間に三つの作文を書くか書かないかで済み、時間もさして取られないでしょう。(6)……

サッカレイはその頃、シェリーの詩を読み批評を書き、また詩やパロディを作つて、かなり文学の方面に傾斜した。『スノブ』という同人雑誌がひと頃発行されていたが、その第四号に「ティムバクトウ」なる詩を載せたこともある。(7)因みにこれはケンブリッジ懸賞詩を狙つて書かれた作品であるが、残念ながらサッカレイは選外、アルフレッド・テニソンが受賞した。

サッカレイの文学熱は様々な形を取つて現れるが、これは学業不振や、

友人との交わり、新しい興味やら新しい生活の目ざめ、そんなものから切り離すわけにはいかない。多感な青年の夢は混沌の泥土に芽生え、それが伸びるか枯れるか判らぬままに、自分のあいだ、ふらふらと揺れていたのではないか。後にギリシア古典の欽定講座担任教授となったトムソン博士は、当時の弁論クラブの同朋として次のような回想を寄せている。

……サッカレイの論題は「決闘」であつたように思う。これには各種の意見が出た。サッカレイの論旨のなかに文学的力量とか何かを見出す者など誰もいなかった。その種の力は、やがて、抜き差しならぬ生活をくぐり抜けるうちに鍛えられて行つたものらしい。……サッカレイはやや怠惰な、しかし悠然とした「紳士らしい」生活を送り、古くからの学友や、のちに助祭長となつた例の二人などを含めていろんな連中と付合つていた。そんな連中やら、私の友人のエドワード・フィツジェラルドなど相手に彼はしょっちゅう文学談義をやつたものだが、「大学」の話は皆無であつた。……

又、トムソン博士は語る。

……しかし大学の成績に無頓着とはいえ、サッカレイはイギリス詩に並々ならぬ理解を示し、昔の英国小説家を激賞した。とりわけ彼の模範はフィールディングであつた。サッカレイはいつもユーモアと剽軽

な態度を見せて、友人のあいだでは高く評価されていた。⁽⁸⁾……

サッカレイの大学生活の一片はこのトムソン博士の回想からも直かに読み取れようが、それに加えて、当時のサッカレイの胸奥に波打つ感情を察するためには、ここでもう一つ、新しい体験、即ちパリ旅行の一件に眼を向けねばならない。

サッカレイは一八二九年の夏休みに三箇月ほど初めてのパリ滞在を経験するが、同行したのは『スノブ』の編集に携わつたウィリアム・ウィリアムズである。ウィリアムズは七歳年長で、いわゆる先輩としての「導き」をしてくれたらしい。名所見物のもとより、芝居やオペラに出掛け、古書や絵を買い、そして何よりもトランプの賭けの味を知つたのは只事と云えない。パリの休暇は、狭い大学生活では思いも及ばぬ異質の世界をサッカレイに実感させた。ひとたびこの空気を吸つてからというもの、良かれ悪しかれ、サッカレイは自己の体中に何物かの目ざめるのを感じた筈である。賭博場に足を踏み入れたと聞いて母親はサッカレイを詰つたが、折返し母に反駁するサッカレイの手紙がある。

——これは人生の書の興味ぶかい一章と云うべきです。それを熟読して僕には益するところが大きいにありました。賭博の経験から、僕はこれまで自負や無知ゆえに見逃してしたこと、自分自身がさほど信用出来な代物であることを知りました。——(中略)——僕は下心あつて出掛けたのでもなく、ひと儲けしたいと思つたわけでもありません。

お母さん、僕はその場所から出たときに悟ったのです。自分がかくも弱く、以前には無知蒙昧にしてべらべら論じていたような、あの悪業に抗する力など微塵も持ち合わせていないことを知ったのです。⁽⁹⁾……

サッカレイの生涯には、なべて体験を通して学ぶという姿勢が一貫している。実生活から下される痛棒ほど確かなものを教えてくれる師はいない。サッカレイはその痛みに耐え、そこに込められた暗示を、ゆつくりと、確実に吸収しようとする。今、パリの町には疑いなく彼の心を捉えるものがあつた。サッカレイは十月下旬に旅行から帰って、その後もパリへの思い遣る方無く、翌年の春の休暇には再度パリへ飛出している。大学を去ったあと改めて絵画の修業にパリへ赴くが、その下地は既に早くから出来上っていたわけである。ゴードン・レイは云う。――さながら燈火に誘われる蛾のごとく、彼はパリへパリへと惹き寄せられて行った。⁽¹⁰⁾

サッカレイは一八三〇年六月にケンブリッジでの学業を放棄するが、その折の苦々しい心境は『ペンデニス』第二十、二十一章に詳しい。その後三年間ほど、否、結婚までの数年間と云うべきかも知れないが、ドイツ各地、パリ、ロンドンにて、サッカレイの精神放浪が種々展開される。ドイツ文学の翻訳を試みたり、法律の勉強を始めてはそれを断念し、『ナショナル・スタンダード』紙に記事を書き、現代小説を濫読するよ⁽¹¹⁾うな日々を送った。何物かが着々と積上げられてゆく類の生活ではない。

文字通り、若き精神の放浪である。

しかし放浪も金の余裕のあるうちならばいい。一八三二年四月から十一月までのサッカレイ日記には、ロンドン・パリの日々がいかにものんびりと、ときには自由気儘な印象さえ留めながら綴られている。好きな芝居やオペラを観たり、しょっちゅう友人と飲食を共にして、また性懲りもなく日々賭博にうつつを抜かすなどしている。ダンディの日々と云えるかも知れない。それでも乱脈な生活に走らなかつたのは、やはり彼のなかの紳士気質が働いて、善悪の分別、知的趣味による自己啓発などの一面がとかく生活の表層に浮上して来たためではないか。ウィリアム・マギンと相識つたのもこの頃である。

六月十日、日曜日――午前いっぱいマギンと共に過す。これほど快い一ときは無い。彼はホメロスを朗読し、小生に勧めてホメロス讃を説く。小生の嘗て思い及ばざること也。さらに彼は毎日ホメロスを読むよう小生を説き伏せた。が、その通りに実行するかどうか判らぬ。彼のホメロス評は知性に溢れ、美しく、広帆なる学識と、機智と、非凡なまでの詩的感性とが見事に融和している。⁽¹²⁾

サッカレイはマギンの秀拔なる頭脳に感服し、マギンの感性に自分のそれと相通ずるものを認めながら日に日に親交を深めるが、こんなところに彼の一つの性向、つまり、好き放題の生活のなかにも高い精神価値に惹かれゆく特徴が現れていると思われる。『ナショナル・スタンダー

ド」紙は、他ならぬこのマギンと力を合せて買収、公刊した週刊新聞である。尤もその内容たるや、必ずしも高級とは云いがたい。

サッカレイが二十一歳になると遺産の相続権が生じて、賭けで背負った莫大な借財も目出度く清算することが出来たわけだが、その翌年の十二月にインズの銀行代理会社が倒産、このあたりで父親の遺産はあらかじめ消えてしまった。サッカレイの相続額は二万ポンドと云われ、その半分以上がインディアン銀行に投資してあったのである。サッカレイは図らずも貧窮の底に落ちた。

——最後の五ポンド紙幣の釣銭をしみじみ眺めながら、ペンデニスはどうとう口を切った。釣銭はウォリントンの一杯のエールと並んで、呑屋の盆の上に載せられていた。「これが夏のバラの最後だ」とペンは云った。「仲間の花どもはとくに散ってしまった。見給え、花束のこの最後の一輪さえ、もう、葉を落している」⁽¹³⁾……

ペンデニスの貧乏生活がここから始まる。それと同時にウォリントンの厚い友情が表立ち、ペンデニスの新しい出発、即ちジャーナリズムへの第一歩が踏出されるのである。作者サッカレイもこれに似た失意や、覚悟や、前途遼遠の感を噛みしめていたであろうこと、およそ推測に難くない。

サッカレイは学校時代から詩や物語など多くの習作を為して来たが、それらの原稿は悉く出版社から断られ篋底に埋れた。その理由は要する

に、「時代の流行に合わない」というものであったらしい。⁽¹⁴⁾ サッカレイは一日思い立って、時代の好尚とやらを、そのスタイルから内容、構成のからくりに至るまで具に研究して我が物にせんと努めた。前述したペンデニス・ウォリントンの件りを思わせる話だが、差当り彼の標的はブルワー・リットンの『ユージン・エアラム』で、この作品をつくり研究して、一八三三年『フレイザーズ・マガジン』に「エリザベス・ブラウンリッジ」と題して一作を寄稿したのである。これは同誌の八月および九月号に掲載された。読者うけを狙った作品制作が無名の物書きにどうしても避けて通れぬ道であったかどうか別として、当初、サッカレイの胸の裡に逸る気持のあったことだけは否めない。そこへ以て、今度は生活の窮乏という新たな外圧が加ったのである。

件の銀行代理会社が倒産した一八三三年の暮と云えば、折しもサッカレイが『ナショナル・スタンダード』紙の面目一新に努めていた頃だが、しかし反面、彼はこの新聞に失望を禁じ得なかった。それより少し前、三三年十月に、サッカレイはパリにて絵の修行を始めている。明けて三四年二月には『ナショナル・スタンダード』紙が廃刊、かくて、絵筆一本で口を糊すべきサッカレイの覚悟が愈々強固になったのである。

サッカレイの絵の勉強はパリとロンドンの両地にまたがって続けられた。三四年九月、再びパリへ赴きアトリエ修行に就く。向う十箇月ばかり祖母のバトラ夫人と起居を共にするが、そのあとは祖母と不仲になり転居、独り住まいの日々を送る。しかし若い頃の貧乏生活にはどこかロマンティックな香りがある。貧乏の底にも若い情熱が、自由が、むせぶよ

うな歓喜の炎が燃え立っている。その若い日々は、『パリ・スケッチ集』のなかに結晶して実に感慨深い。いみじくもゴードン・レイが指摘しているように、——「我が黄金の日々は金の無かりしときなり」⁽¹⁵⁾というものである。

——ここフランスでは、若者でも十ポンドほど払えば、ありとあらゆる助言、モデル、等々の便宜に与ることが出来ます。おまけに、全くの無料で、イギリスなどでは望むべくもない絵の勉強の良き刺激を山ほど受けられる。——通りという通りには画商店が立ち並び、人びとそのものからして正に歩く絵なのです。教会、劇場、食堂、演奏会場もまた絵で埋め尽くされている。周囲の自然さえ、いともやさしく微笑みかける。空は一年の大半を通して耀きわたっている。——（中略）——

ここでの若い画家の生活は、およそ最も気楽にして最も陽気、また最も不潔なものであります。例えば十六歳で田舎からパリへ上京して来る。その両親は年に四十ポンドの仕送りと、息子の先生にも支払いをして、本人はラテン区またはノートルダム・ド・ロレットの新しい一郭（つまり画家の巢窟）に居を定めます。さて、アトリエには朝の早い時間に現れて、これも等しく愉快かつ貧乏なる二十人ばかりの連中に混じって仕事を始める。誰しもお気に入りのパイプを口にくわえ、絵という絵はもうもうたる煙と、騒々しい駄洒落やら粹なフランス訛、さらには合唱の雄叫びのなかで仕上げられ、こればかりはもう、現場

に居合せぬ者にはとんと見当もつかない世界なのです。——（中略）——

こんな仲間やら押出しに囲まれて、フランスの画家のたまごは日を送り腕を磨くのです。夜には何をしようぞ。どこの劇場で、どこの酒場で、またどこの怪しいお針子を連れて——しかし、そんなのは申すほどでもありますまい。ただ小生も知る或る男などは、謝肉祭のパティに出るのに外套を質入れして、そのあと六週間というものの、件の上衣を請け出す日まで頗る快活にシャツ一枚ではつつき歩いたものです。⁽¹⁶⁾

サッカレイは一年も経たぬうちに立派な絵を描いてみせると自負していたが、実際なかなかそうもいかない。ルーブルに通って名画を模写したり、各種の画風に触れて眼を肥やすなどの努力の証は『パリ・スケッチ集』に散見するところだが、サッカレイの真骨頂はむしろ、かねて関心を傾けて来たカリカチュアのなかにこそ発揮されたようである。「鉛筆にせよ絵筆にせよ、まず画家としての忍耐心に欠ける」とジョージ・クルークシャンクが語り、「人間の顔を誇張するな、あるがままに描け」とフィツジェラルドが忠告しても、サッカレイとしてはいずれ等しく無理な注文であった。⁽¹⁷⁾結局、サッカレイは自己の画才を疑い、その後も暫く、低調にして不如意の日々を引摺りながらパリの町に暮したのである。同業の友人フランク・ストーンに宛てた手紙でサッカレイは弱音を吐いている。

——僕は絵を破いて破いて、もう牛の一頭ぐらい焼けるほどに屑がたまった。努力と共に日が昇り、失敗と共に日が沈む。僕はほとほと自分が、絵が、絵に関係する一切が厭になった。ここ一箇月はソファに寝ころんで小説ばかり読んでいる。鉛筆なんかに触れもしない。

この六箇月、僕は見るべき作を一つも画いていない。ああ、神様、あなたのお知恵がいつになれば僕の指に力を、僕の色彩に耀きをお授け下さるのか。もしも向う六箇月のあいだにましな仕事を為し得なかったら、僕は立上り、部屋を出て、首を吊ろうと思う。⁽¹⁸⁾

しかし、サッカレイは首など吊らなかつたのである。彼の五体には生来楽天の血が駆けめぐっていた。生活の隅にはいつも小さな喜びがあつた。さもなくば、ああまで頻繁にカリカチュアを描き、カリカチュアの精神を永く維持することは出来まい。⁽¹⁹⁾

それに加えて、サッカレイはほどなく一人の娘に恋をしたのである。くすんだ生活が一どきに華やいだと云えよう。思うに、サッカレイの苦難の日々の背後には必ずや女性がいる、女性の力が陰に陽に働いている。チャータハウス校からケンブリッジ大学、またその後もずっと母親の影は彼の生活盤上にちらちらするが、今、サッカレイ二十四歳の夏、ここに新なる女性イザベラ・ショーが現れたのである。

ショー家の歴史は十七世紀の先祖がチェスタよりアイルランドの地に住んだあたりから始まる。イザベラの祖父マシウ・ショーは法廷弁護

士であつたが、二度目の妻とのあいだに八人の男女をもうけ、そのなかにイザベラの父マシウ・ショーがいた。一方、祖父が最初の妻とのあいだにもうけた男子メリックは長じて軍人となり、インドにて名を成し、この人物がやがてイザベラの父を援助して陸軍の職に就かせるのである。イザベラの父マシウ・ショーはインドの各前線で勇猛果敢に戦い、大いに武勲をたてた。一八一三年末にはアイルランド富商の娘イザベラ・ゲシン・クレイと結婚して、さらに数年後、中佐の位に昇進した。ところが同二六年、マシウは病に仆れ妻と五人の子を残して他界するのである。五人の子の二番目がイザベラ・ショーであつた。

一家の主が亡くなると、家族は忽ち生活に窮した。インドの地を離れパリへ流れて来たのも、事実、経済上の理由が何よりも大きい。その後一家はパリの安宿に暮して、母は娘を溺愛し、娘はいつまでもあどけない趣を留めて母親に付き従つた。こんな折に、或る日、娘は将来の夫サッカレイに出遇つたのである。出遇いの方はバトラ夫人宅での集いであつた。『虚栄の市』のクローレイ老嬢はバトラ夫人を写したと云われるが、因に作中の老嬢もまた若い男女の結ばれるのに一役果している。

一八三六年四月半ばから同年七月までのサッカレイ書翰に、いわゆるイザベラ宛の恋文が数点見える。サッカレイがどれほど結婚を望んでいたか、またイザベラがどれほどためらい、その母親がいかに頑強に反対していたかの知れる手紙である。サッカレイは四月半ばにロンドンの親許へ帰り、結婚の意を伝えてその結果をイザベラに報じた。⁽²⁰⁾

——結婚するのが何よりだと父は云い、母も同じことを云った。僕としては、両親の意向に逆らう筈もない。さあ、可愛らしい下着ときれいなナイトキャップを準備するんだよ。僕等はあと少し、あと二三箇月もすれば、一緒にラスコム司教の言葉を頂戴して結婚する。それから子供をつくって、御伽噺にあるみたいに末永く仕合せになるんだ。この話が君にも同じように嬉しいかい？ 君は喜んで君の家庭と、添寝の相手と、やさしい母上から離れて、この陰気な白髪頭の、しかも実入りの乏しい鼻の潰れた男と一緒にやってゆく覚悟があるか？ 愛しい君よ、今こそとつくり考えておくれ。君はこれまで（結婚の見通しの少なかったことを思えば已むを得ないが）、いざ僕と結婚すればどうしても自分の身辺が変わり、考え方も、また義務も変るといふ、そのあたりを敢えて考えまいとしていたのではないか。僕にはそんなふうに思われるのだ。⁽²¹⁾……

この些か有頂天ぎみの文章の蔭にも、サッカレイの決意のほどがありありと窺える。翻って思えば、サッカレイがほんやり結婚を夢見てから既に数年になり、例えば一八三三年九月六日付の手紙、また同年十月二十二日から二十九日に認めた手紙のなかで、漠然ながら母に結婚の願望を洩らしているのが注目される。⁽²²⁾興味深いのは、まだ定職もなく、確たる収入の見通しすら立たぬ一青年が、早々と妻を迎え家庭を築こうとの甘美な憧れを抱いていた事実である。サッカレイの独立意識、結婚観、またサッカレイと女性、サッカレイと家庭、ここにあれこれ想像されよ

うが、それはともかく、今や彼の憧れは紛れも無い実体を得て恋の火柱が高く燃え上ったのである。

サッカレイはイザベラに何を見ていたか。このあどけない、小柄の、家事その他雑事一般に於いていとも頼りない娘が、サッカレイにとつてどれほどの宝であったか。「朝になれば君のことを想い、夜は君の夢を見る」（一八三六年四月十八日付）、「遠からず、我が小さき恋人は僕のものになる。死神が僕等を引離すまで僕のものだ」（同四月二十五日付）「僕は自分の妻にどんな女性よりも立派になつてもらいたい」（同六月五日付）、等々、サッカレイの熱い言葉が手紙の処々にばら撒かれていて、彼の恋慕の情は疑うべくもないが、それはときに矩を越え滑稽味さえ露にする。イザベラは要するに、サッカレイにこの種の手紙を書かせる相手であつたと考えておけば良いかも知れない。少女さながらの顔付で微笑み、日常身辺の助言をいちいち受けながら静かに寄添っている。サッカレイの剽軽な物云いなど、どこまで彼女に通じるか判らない。しかし彼女は汚れない澄んだ声で歌う。純真無垢の乙女の歌である。サッカレイとしてはこれで充分であつた。彼の生活に欠けていて、彼のかねて願っていたものが、この二十歳のアイルランド娘のなかに確かに認められたのである。

イザベラとの新婚生活を回想した「ブイヤベースの歌」にはひどく甘美な夢のメロディが流れている。若い二人の一ときの幸福が、過去が、不滅の調べに乗って甦る。サッカレイにとってイザベラとは、おそらくこの歌のなかに生きているような女であつたろう。

きれいな娘が寄添うて

可愛い、可愛い顔が、やさしく見上げてた

甘い声でささやいて、にっこり笑えば心も和む⁽²³⁾

それにしても結婚に至るまでの道は滑らかなものではなかった。サッカレイはときにイザベラの冷淡を託ち、その母親の頑固な無理解に腹を立てた。しかしサッカレイは、——あののんびり屋と云われたサッカレイが、ここでは勇ましい戦士さながら、いかにも男らしく積極的な態度を示すのである。そして、この態度はイザベラとの結婚後も相変わらず続く。結婚後の艱難辛苦についてはまた後で述べるが、結婚前、既にイザベラとの恋を通してサッカレイは大きく脱皮したのである。もはや、母親べったりの青二才ではなかった。

サッカレイとイザベラとその母親、この三者の気持のずれ、或は性格の相違が『フィリップ』の各登場人物の裡に表現されている。フィリップは若きサッカレイ、ベインズ少将夫人はイザベラの母親、そして娘シャーロットはイザベラの性格の一端を反映していよう。

——シャーロットは、ああ、世の善良なる婦人がときにそうであるように、これまた偽善家であった。彼女には胸の苦しみがあつて、それをフィリップに隠していた。また疑いと恐れがあつた。それらはフィリップが現れるなり雲散霧消して、彼女は恋人の逞しい腕に絡みつ

恋人の正直な青い眼を凝つと見つめるのであつた。彼女は辛い夜をまんじりともせず泣き明かしたのだが、そんなことは暖気にも出さない。陰気な婆さんが白い上着にナイトキャップを被り、燈火を手にして、夜ごとに娘の小さな枕辺を訪れるのだ。老婆はその場に立ちつくし、あの嗟れ声でフィリップの悪口をわめき散らす。老婆の骨ばった指が、哀れなフィリップの破れ外套よろしき人格の裂け目を突刺し——穴を突刺して、それを余計大きくしてしまうのだ。老婆は泥靴で踏みにじるような振舞に及ぶ。哀れな若者のパイプを思い出して、例の尖った鼻をつんと突出す——あのパイプ、愛しい恋人が傍にいない折の有難い友であり、慰めでもあるのに。また老婆はその晩の客の話を持出して、さる殿方は気があること間違いなしたの、さる殿方は礼儀正しいとか育ちがいいなど、あれこれ弁じ立てるのだ。⁽²⁴⁾

イザベラの母親には少なからず悩まされたが、ここで『虚栄の市』ばりの比喩を用いるなら、サッカレイは遂に恋の戦に勝利を収め、一八三六年八月二十日、晴れてパリの都にてイザベラを我が妻とするのである。当時彼は『フレイザース・マガジン』に僅かながら文章を寄せ、ほどなく継父が企てた日刊紙『コンスティテューショナル』のバリ通信員として同紙に週一、二度の記事を書くことになるが、これから先は仕事と家庭、その両面において気を配らねばならない。これはサッカレイ自身が選んだ道であつた。サッカレイは自立の喜びと、新婚家庭の香しい空気と、また胸に迫る強い責任感を同時に味わっていた筈である。

サッカレイ夫婦は約七箇月後、パリからロンドンへ居を移すが、これには『コンステイテューショナル』紙の経営不振と、イザベラの近い将来の出産が関わっていたらしい。夫婦はアルビオン街十八番地にカーマイクル・スミス夫妻と同居した。かくて、春の夢のような二人だけの日々が、おそらくサッカレイの生涯の最も仕合せな時期が幕を閉じて、このあとは慌しい生活の勢いに流され、歳月が過ぎ、やがて、人生の苦痛と悲しみが襲来する。

英国では一八三〇年代の中頃からジャーナリストの社会的地位も徐々に上り、以前ほどやくざな商売人とは見られなくなった。折しもサッカレイはジャーナリストの道を着々と邁進していたのである。マギンの世話による『フレイザース・マガジン』が彼の主だった収入源であり、「イエロウブラッシ・ペーパーズ」、「キャサリン」、「落ちぶれ紳士物語」と、次々に捻りのある作品を同誌に連載して足場を固めて行った。⁽²⁵⁾

そして一八四〇年七月には、『パリ・スケッチ集』が二巻本となってマクロウン社から出版される。これはサッカレイの上梓した最初の本であった。大学を飛出してからちょうど十年、ここに至って、絵画、文学、人生一般を見る眼が愈々独自のスタイル形成に拍車を掛けて来たように思われる。前述した通り、サッカレイは読者に面白い読物を書くように努めた。とにかく何でも書いた。この旺盛な執筆欲はジャーナリズム界を舞台に衰えるところを知らなかった。

サッカレイはまた若い妻を持つ身である。ときに仕事のため家を留守にすることがあれば、旅先からイザベラ宛に細々と身辺の記事を書き送

り、妻のいない寂しい旅の身空を嘆いた。以前、母宛に綴ったような、あの連日の報告書まがいの手紙が、今では替って妻イザベラに宛てられるのである。

——僕はまるで片足をコラム街の我家に置いて来たようで、今それが無いために、うまく歩けないでいる。(一八三八年三月五日)

——僕等は一晩中、僕の可愛い妻の話をして、しまいにはもう、さつさと帰って君の傍に居たい気分になられた、堪えられなくなった。(同三月十一日)

——もう手紙は出すまい、とここに書きかけたけれど、止めた。毎日一分間でも君とおしゃべりするのが、僕にはうれしいのだ。(同三月二十五日)

長女アンの誕生は一八三七年の六月であった。その後一年足らずして、一家はグレイト・コラム街十三番地に引越すが、この新居で、三八年七月に次女ジェインが生まれる。カーマイクル・スミス夫妻は、『コンステイテューショナル』紙が潰れて家計逼迫し、アルビオン街からパリへと移住した。継父は既に『コンステイテューショナル』紙にかなりの私財を投じていたのである。

サッカレイの身辺は日々慌しく回転して行つた。仕事は増え、家庭内

は賑やかになり、生活全般が多彩に複雑にふくらんで、一家の柱サッカレイとしては、さながら孤舟を操り人生の激流に乗り出したかの感があつた。そして一つの危機、大きな試練が、一八三九年三月半ばに次女ジェインの病死となつて襲い掛つたのである。

——私は愛しいジェインを返してくれとは云いますまい。あの子を人生のどん底と苦痛に晒したくはありません。⁽²⁶⁾

サッカレイは母宛の手紙でこう語っているが、そう云いながらも、努めて感情を殺して、断腸の思いに独り堪えている男の姿が書中に偲ばれるのである。サッカレイはこの手紙を普段の調子で、さり気無く、最近の仕事の話などから書出している。そのあと娘の死を、これまた近況の一片でも伝えるような具合に持出す。ここにサッカレイの苦渋がひそんでいない筈はない。サッカレイの悲しみは数年のうちに濾過され、濃縮されて、『ホガティの大ダイヤ』に明らかな形を留めている。この種の経験と作品との関係は、サッカレイの制作方法の基礎でもあり、一大特徴でもあつた。人生の何かしら抗いがたい力に直面して、それがのちに、作品を磨き作品の隅々に妙なる光芒を与えるのである。

ティトマーシ夫婦のあいだに男児が生れる。細君はこのほかこの子を可愛がるのだが、——

月曜日の朝に宿替えをする予定であつた。けれども土曜の夕、子供が

ひきつけを起し、日曜日の丸一日、母親は看病に打込み恢復を祈つた。それなのに神はこの無垢の子を我等から取上げて、日曜日の夜十二時、子供は母の胸に骸となつて抱かれたのだ。アーメン。⁽²⁷⁾

男児の死はいとも素気無く『ホガティの大ダイヤ』のなかに表現される。続いて細君の悲しみが僅かに描出され、語り手が、即ち作者サッカレイがこんなふうに真情を吐露する。

——彼女の悲しみをここに描写しようとは思わない。それは神聖にして秘すべきものだ。余人が紙面に書き立てて衆目に晒すなど、以ての外である。そもそも子供の死なぞに触れないでおけば良かった。その死は我等にとって、むしろ人生の大きな救いなのであり、妻もしばしば涙ながらにそれを感謝したものだ。

ここに、サッカレイの経験と作品との関係が明瞭に現れているように思われる。サッカレイは実体験をそのまま文章に綴るなど考えもしなかった。生の感情、生の事実は、彼の眼に余りに眩しかった。刺激が強すぎた。見方によつてはこれも妥協と云えるかも知れないが、文学表現とはむしろ、赤裸々の事実を隠すためのものである。作中ティトマーシの場合とは正反対に、実際、子供の死んだ日を生涯忘れなかったのがサッカレイその人なのである。

次女の死が母親イザベラをどれほど悲嘆の底に沈めたか、これについ

でも議論の余地は無い。それから一年余りして、次の子ハリエツトが誕生する。そして、そのあと間もなく、イザベラの精神に変調が現れるのだが、これの原因の一つに次女の死を無視することは到底出来ない。愛児を失った悲しみが、来る日も来る日も母親の精神を痛めつけた。しかもその痛みは彼女の精神平衡のぎりぎりの一線を越えることすらあった、と考えられる。

「有難いことに、イザベラはだいぶ好くなりました。薬も殆ど用いておりません」——これは一八四〇年七月十八日、サッカレイが母に宛てた手紙の一文であるが、イザベラの病気を暗示する最初の言及である。続いて七月三十日の手紙に、「イザベラは大方好くなりました。嬉しいかぎりです」とある。だが、八月の初めにサッカレイがベルギーへ取材旅行に出て、その間、留守宅に残されたイザベラはサッカレイの母宛に手紙を綴った。

——このところ体調が芳しくなく、気が滅入っております。自分でも何だか別人のようで、ただ、皆さん、お仕合せでありますようにと願うばかりです。——（中略）——正直申して、ちよつと昂奮きみなのですが、私は強い女でもありませんし、頭がまるで風船みたいにふわふわするのです。これはただの衰弱で、散歩でもすれば治るのでしょうが、もしもこの手紙に支離滅裂なところがありましたら、どうぞ宜しくお察し下さい。——（中略）——主人は十五日に帰って参ります。いつものように、どっさり収穫があるでしょう。そのことだけは心配

ないのです。⁽²⁸⁾……

果してサッカレイがベルギーから戻ったときには、イザベラの様子尋常ならざること、もはや疑うべくもなかった。早速、一家はイザベラの療養のために海辺の町マーゲイトへ向った。サッカレイは当地から母にこう書き伝えている。

——私の若い妻は、遺憾ながら、帰宅してみればとんでもない無気力と鬱状態に落ち込んでいて、ポウエルさんの忠告では直ちに彼女を海辺へ連れ出すべきとの由、そこで今夜、この地にやって来たわけです。妻は当初の状態から抜け切ったように見えて、私がいなくなると、またひどい憂鬱に襲われるのです。——（中略）——しかし今日は我等の結婚の日で、嬉しい哉、新鮮な空気と、陽光と、旅の幾許かの昂奮とが効を奏したらしく、彼女は快く疲れて床に就きました。⁽²⁹⁾……

事実、イザベラの容態は快方へ向うかと思えばまた悪化して、波のうねりのように上下を繰返し、サッカレイ自身このうねりに翻弄され、疲れ、衰弱して行つた。手紙の処々に彼の弱音が見える。

——私にまでうつらぬよう努めるのは、実に困難です。ずっと彼女に付き切りなのですから。あの哀れな眼が此方を凝つと見つめるなかで、仕事なんか碌に出来やしません。（一八四〇年九月一日、母宛）

——二つの義務、つまり、仕事と看護の両方をこなすのは、たいへんに難しいことです。(前掲)

——ああ、ティトマーシ、ティトマーシ、何故、結婚なぞしたのか。

——ともかく、良かれ悪しかれ、いずれ等しく耐える力を授け給えと神に祈ろうではありませんか。(同九月十日、母宛)

マーゲイトの地に半月余りを過したのち、ロンドンの住居へ帰って来るなりイザベラの病状はさらに悪化した。ここでサッカレイは一つの決断をする。九月十二日、一家を引き連れてアイルランドのコークへ、即ちイザベラの母親の許へ旅立つのである。

イザベラの母親はサッカレイ一家の来着を喜ばなかった。ひとりイザベラの妹ジェインのみが、何かと姉を励まし面倒をみてくれた。サッカレイと姑との感情摩擦は結婚前からずっと尾を引いて、とりわけこういう事態に至れば只事ならず、もろに牙を剥いた恰好で表に現れた。しかし、とサッカレイは思い止まる。

——ショー夫人の振舞については、一から十まで黙認せざるを得ません。もしも私が一言云えば、まさしく相手の思う壺なのです。彼女は私の衰れた妻を攻撃してこちらの領内に戦火をもたらし、自分とジェインはさつさと妻から手を引いてしまう、という結果になりました。

そんなわけで、私はもはや彼女の為すがままなのです。⁽³⁰⁾

サッカレイは折々母に手紙を書いて、アイルランドの日々、イザベラとその周囲について詳しく報じている。イザベラの病勢は、ここでもまた一進一退した。

——彼女は相変わらず私や子供たちのことなんて、ちっとも気に留めないのです。いつも眼を離さぬよう注意していないと、またも自殺なぞ図られかねません。(九月二十日)

——彼女は笑い、洵にあどけない簡単なおしゃべりをします(ごく些細な事がらに幾許かの迷いを見せながら)。そうかと思えば、さめざめと泣き、自分の欠点だの誤ちを責める。それから可愛いアニイを傍に引寄せると、アニイのほうは母親を見上げて、どうか神様、と祈るのです。(九月二十一日)

——朗読、おしゃべり、子供たち、何をどうやっても彼女の興味を引くことが出来ません。彼女はそれらにすっかり関心を失ってしまったているらしく、ただ憂鬱に包まれ、自分はあるとあらゆる不幸を主人に背負わせた、自分は妻として失格だ、というようなことばかり考えるのです。(九月二十三日)

——残念ながら、妻がだんだん好くなっているとは申せません。確かに肉体上はずっと健康になりました。良く眠り、食べ、良く消化します。ところが精神面では、この三日間こそ好調子だったものの、今日になってまた雲が掛り、取止めが無くなってしまいました。(十月四日)

サッカレイはアイルランドへ渡る折の妻の自殺未遂を語る。その後の付き切りの看護を、仕事の方面の焦りを、またショー夫人の冷たいあしらいを、そして、「どうか皆さんで智恵を集めて、どうすれば私たちをこの泥沼から引上げ得るものか考えて下さい」と母に訴えるのである。勿論、名案なぞあろう筈もない。人間の試練の本当の意味がここにある。これをただ黙って実感し、泣言も甘えも、一切の足掻きも彼方へ遠のいて、そのときこそ、あれこれの理窟を越えた大きな静寂が訪れる。サッカレイの文章の片隅に踞る静寂とは、このような一連の経験の末端にうつすらとひろがっているものなのだろう。それはいつしか、ひたむきな祈りに転ずる。

——私たち夫婦はこれまで互いの義務を怠って来ました。それらを受止めるのに真面目であつたとは申せません。私は家庭をもっと愛すべきなのでしょう。書齋での仕事ばかりでなく、炉辺の務めもさらに学ばねばならない。そうすれば、おそらく、この辛い試練を抜けて大きな利益が私たちにもたらされましょう。——もしも神がその機会を恵

み給うなら。ああ、神よ、我をもっと謙虚たらしめ給え、利己的なからしめ給え。⁽³¹⁾

結局、アイルランド滞在は一月足らずで切上げ、イザベラの健康なお戻らず、サッカレイと姑の確執も一層甚しくなった。かの母親は、娘を癲狂院に入れてしまえとまで云つたのである。サッカレイの胸の裡はおよそ察せられよう。

愈々本格の闘いが始まったと云うべきかも知れない。若き幸福の幻想は消えた。安楽な生活など、もはや望みがたい。現実の荒波を我が胸板に受止めて生きるほかはない。このときほどサッカレイが先人フィールディングの逆境と、忍耐と、逞しい筋骨を身にしみて理解したときはあるまい。

サッカレイは子供たちをパリ在住の母の許に託し、四〇年十一月末には遂にイザベラをジャンヌ・エスキロールの病院に入れた。これはパリ西方の町にある有名な病院で、サッカレイとしても期待するところ少なくなかつたようである。しかし実際、どれほどの効果があつたろう。

「昨日、妻に面会した。エスキロールの『世に高名なるメゾン・ド・サント』⁽³²⁾に入院して六週間、これが最初の面会だ」とサッカレイはフィツジェラルド宛に書いている。「妻は初め、ひどく喜び眼に涙を溜めて僕にキスをした。それから彼女は向うへ行つてしまった。まるで自分が、これほど立派な夫には値しないとも思っているかのように。ああ、神よ、妻を救い給え」

或はその後、母に宛てたこんな手紙もある。

——この一週間、二度病院を訪れ、明日また訪ねます。敢えてお報告するほどの効果も見られません。妻はやや活発になり、朗読をしたり、夜には少しおしゃべりもします。昨日など、私が帰ろうとすると、まだ居てくれとせがむのです。——いつもながら、これは何かの前兆というものです。さて、二人して田舎道を延々と歩きました。彼女の発する言葉は、ちょうど子供の戯言です。⁽³³⁾……

こうして、半年ほど経つと、医者とは匙を投げ、サッカレイとしては失望するよりもむしろ晴々とした気分であった。妻を病院の外へ連れ出して、川辺の心地好いレストランで食事をする、そのときの喜びがプロクタ夫人宛の手紙に溢れている。⁽³⁴⁾「妻は先週の今日の百倍も好くなりました」とあつては驚かざるを得ないが、これはサッカレイの施した治療薬、つまりシャンペンが思わぬ効果を発揮したのであつた。サッカレイはイザベラを取り、やや有頂天きみであつたに違いない。どうしても妻を病院などに閉じ込めて置きたくなかつたようである。

そのあと暫くサッカレイはパリにてイザベラの面倒を見るが、仕事との両立はいかにも難しい。「奴隷のごとし」というのが本心であつた⁽³⁵⁾。已むなく看護人を雇い、サッカレイはイギリスへ帰り、またパリへと戻る。そして、四一年八月には、次の試みとしてイザベラを伴いライオン地方のサナトリウムを訪れるのである。

現地から寄せた数点の手紙によれば、サナトリウムの治療法たるや、大汗をかかせ冷水を浴びせるという甚だ荒々しい類であつたらしいが、しかしこれがめきめきと効果のほどを現したと云う。一箇月の試みを重ねて、サッカレイは、「どうやら彼女を正気に戻すことが出来そうだ」と、内心の喜びをフィツジェラルド宛に綴る。⁽³⁶⁾サッカレイ夫婦がパリへ戻つたのはさらに一箇月半後、十月の末であつた。

結局、イザベラは治りかけたと思うや、またも悪化へと転落したのである。この間のサッカレイの悲嘆を伝える手紙類は現在のところ一点も遺されていない。一八四二年二月、イザベラはパリ近郊の専門医ブュザン博士の許に委ねられる。発病後十八箇月に互るサッカレイの諸々の努力が、闘いが、ここで遂に諦めに変るのである。

「苦痛と、願ひ……そして、苦い苦い涙の年」であつたサッカレイの試練は、彼の性格を鍛え、彼の理解力を深め、また彼の才能を成熟させた。嘗て味わつた家庭の幸福でさえ、今それを失つてみて、はつきりと眼に見えるものがあり、心に感ずるものがあつたようだ。⁽³⁷⁾

とゴードン・レイは述べているが、ここで再び思い出されるのが『ホガティの大ダイヤ』である。かの作品に、家庭の不幸は色濃く描出され、例えば大学時代の友人ジョン・スターリングのごときは、「フィードリングやゴールドスミスにあれだけのものがありや。サッカレイこそ真の天才です。静寂とゆとりが約束されれば、これまでの文学の何よ

りも長持ちする傑作を書き、将来の無数の読者を喜ばせてくれるでしょう。この作品の一頁には、誰々の作品全部を合せた以上の真実と、あるがままの感情が認められます⁽³⁸⁾とまで絶賛している。事実、『ホガティの大ダイヤ』の評価はサッカレイ愛読者のあいだで甚だ高く、サッカレイが「家庭」を実感し、「家庭」の裏側を直視した最初の統一ある作品として、ここにサッカレイ文学の明らかな開花を見るのも無理からぬことである。

妻をプエザン博士に任せて以後、一八四五年十月に至るまでの約三年間、サッカレイは種々執筆に打込み、その傍ら、クラブや酒場に入入りしては友人との交際に暫し孤独を忘れた。仕事に情熱を傾ける一方、蔭ではいつも妻子を思い、過去を振り返り、平穩な一家団欒の図を空想した。「半ダースもの書評やら新聞記事を朝のうちに片付け、夜は飲食と談話にて自ら甦る⁽³⁹⁾」——この不撓不屈の大男が、一方では、ふと浮んだ過去の一片に、帰らぬ昔日の光景に、「子供ののように泣いてしまふ⁽⁴⁰⁾」のである。

またサッカレイはロンドン・パリ間を頻りに往復し、加えて四二年の夏から秋にアイルランドを巡り、四三年夏にはオランダ、ベルギー各地へ、さらに四四年八月から翌年二月に掛けて地中海近辺の国々を旅行した。旅の収穫は『アイルランド・スケッチ集』や『コーンヒルからグラインド・カイロへの旅』にまとめられている⁽⁴¹⁾。

確かに充実した三年間には違いない。しかしサッカレイは妻子の世話を他人に任せて、謂わばしがらみを断つように新生活に臨んだかと云え

ば、決してそうではなかった。この三年間の彼の生活感情に、平明な淡彩画のごとき趣は無い。

サッカレイは早くから妻子をロンドンに引取りたいと考えていたらしく、その意向はイザベラや娘アンに宛てた手紙に明瞭に現れている。娘宛の手紙には親子の固い絆が窺われ、妻宛の手紙にはサッカレイ一流の剽軽な筆触がなおも生彩を留めている⁽⁴²⁾。まるで旅先から家族に綴った手紙のようで、ふと、一家が再び居間に寛ぐ日の遠からぬことを空想させるものである。

しかし反面、サッカレイの腹はもう決っていたと云えるかも知れない。イザベラからの通信も何度かあったらしいが、サッカレイの言によれば、「妻の手紙をまず眼にして、私は胸が詰り暗澹たる気持に沈みました。

それでも手紙は何とか理解可能のように思われ、彼女の思考のはこびは、こびと称び得るとして——それにも随いて行けなくもない。

……」（一八四二年六月二十六日、母宛）、「彼女の手紙は相変らずまとまりがなく、手の付けようのないほど莫迦げています」（一八四五年九月七日、母宛）という次第であった。サッカレイは通常の夫婦、親子関係、また通常一般の家庭という、もはや叶わぬ夢をいつまでも弄びはしなかったろう。異常は既に一つの動かざる現実として、彼の胸中にはっきりと捉えられていた筈である。

——妻は断然良好です。全く以て良好です。それなのに、どうして本復しないのか不思議でなりません。或は、かの衰れた女の心が私ども

の所へ戻るのは、もう永久にあり得ないのかも知れません。この頃そんなふうに思われるのです。⁽⁴³⁾

これがサッカレイの一個の現実であつた。それにしても、この悲しい現実対処を可能たらしめたものは何か。母の変らぬ愛情、子供たちのあどけない表情、過去の数々の思い出の結晶、そして次第に高まりゆく文名、——さまざま考えられようが、総じて云えば、サッカレイは現実生活の大切な一部を切り落しつゝ、残余の掛替なきものを断じて手離さなかつたために、やがて傷口は覆われ、厚い皮膚が張り、かくて日常の一葉また一葉が散るべくして散り、記憶と忘却の狭間に埋積した行つたものと思われる。現実はいずれ、ときの移ろいと共に過去の厚い層のなかに畳まれる。

それならばサッカレイに、過去とは何なのか。「思い出の作家」というような形容を越えて、サッカレイは過去にこそ人生の真実を、永久に帰らぬが故にそれ自体完結の美に耀く一片の詩を読み取っていたのではないか。文学の仕事の意味がそこにある。ただサッカレイは、彼の気性からして、詩の情感に自ら溺れるのを避け、作品はあくまで作品の冷たい衣を着ていなければならぬ、と考えた。無論、その衣の奥が透けて見えないこともない。

『ヘンリ・エズモンド』が十八世紀の衣裳を巧みにまといながら、そこかしこに作者の帰らぬ過去の断片、もの悲しくも貴い詩をひそめているのは見逃せまい。過去が耀き、虚構が脈打ち、それにつれて身辺の現

実が余りにも定かならず、余りに心許無きかに見えて来よう。そうなる、これはまた『虚栄の市』の世界そのものへ繋がるのではないか。

一八四二年の夏から、サッカレイは『フレイザーズ・マガジン』のほかに『パンチ』と深く関わる。この雑誌には五一年に至るまで三百八十篇ほど書くが、そのなかにはサッカレイ特有の人間および社会観を披露した『英国俗物誌』もある。サッカレイの眼は人間の表層の、しかもその裏側を見ていて、作者自称するに「卓抜せる博識のモラリスト」、またこの書き物を「一俗物による俗物誌」としているあたり、なかなかの捻りがある。この捻りもまた『虚栄の市』に繋がる特質の一つに相違ない。

『パンチ』に載せたほかの文章では文学批評や美術批評が豊かに展開され、『パリ・スケッチ集』、『モーニング・クロニクル』の各評論と併せて、批評家サッカレイの面目躍如たる一面が窺える。『パンチ』は「ロンドン・シャリヴァリ」などと称せられ滑稽雑誌として始まったが、サッカレイはここで大いに筆を揮い、やがて彼の文名と経済も漸く安定をみたのである。その間に、力作『虚栄の市』が書き継がれて行つた。

『虚栄の市』の土台は長きに亘ってゆつくりと踏み固められて来たかの観がある。草稿の書出しは一八四五年二月、イタリアから帰国して間もない頃と云われる。翌年一月までにはブラドベリ・アンド・エヴァンズ社が月刊による発行を引受け、表題が『主人公無き小説、ペンと鉛筆によるイギリス社会の素描』であつた。その後、同年十一月の『パンチ』に広告が出て、ここで初めて『虚栄の市』の題が固まり、漸く世に

出たのが翌四七年一月のことであった。

サッカレイは既に妻を英国に連れ戻し、信頼のおける婦人の手に委ね、さらに二人の娘をロンドンの新居へ迎えて新しい生活に踏切った。⁽⁴⁴⁾「私たちがヤング街に移って来たのは、私が九つで、ミニイが六つのときでした」とリッチイ夫人は回顧する。

—— 私たちが到着したとき父は不在でしたが、翌朝早く、着換えをしたり女中が紐を結んでくれている最中に、父がドアを叩いて入って来るなり私たちを抱きしめました。

何もかもが珍しく新鮮に見えました。客間の卓子の上には『パンチ』が積んであり、立派な赤表紙の保存版やら、書棚や戸棚のある古めかしい勉強部屋、そして父の書斎、その窓辺には蔦が絡まり陽が燦々と射し込んでいました。—— (中略) ——

ヤング街の日曜日には課業が無く、私たちは父の書斎で木版画の手伝いをしました。ときに仕損じを消したり、版木のチョークの跡を洗い落すなどしたものです。誤って完成の絵を消してしまったときのこととは今も忘れません。そのとき『パンチ』の使いが玄関で作品を待っていたのです。⁽⁴⁵⁾

ケンジントンのヤング街十三番地、ここがサッカレイの人生の再出発であり、名作『虚栄の市』の各章が形を成して行った作家の仕事場でもあった。

(註)

- (1) Anne Thackeray Ritchie, *The Two Thackerays*, Vol. 1, AMS Press, Inc. New York 1968, pp. 56-57. ブラザートン夫人のラークスミア回想は Gordon N. Ray, *Thackeray, The Uses of Adversity*, Oxford University Press, London 1955, pp. 102-103 にやうに詳しく。
- (2) Thackeray, *The Works of William Makepeace Thackeray*, Vol. III (*Pendennis* Vol. I) Smith, Elder & Co., London, 1875, pp. 12-13. この作は前掲ブラザートン夫人の回想よりも約四十五年前に公刊された。
- (3) *Ibid.*, pp. 13-14.
- (4) *Works*, Vol. IV (*Pendennis*, Vol. II) p. 32.
- (5) J. A. Sutherland, *Thackeray at Work*, University of London, The Athlone Press, 1974, pp. 45-55 参照。本論文は *Pendennis*, chap. 41 の生原稿を検討したもの、頗る示唆的である。
- (6) Gordon N. Ray (ed.) *The Letters and Private Papers of William Makepeace Thackeray*, Vol. I, Oxford University Press, London, 1945, p. 56.
- (7) *The Two Thackerays*, Vol. II, pp. 439-442. に同詩が註付きで紹介されている。
- (8) Philip Collins (ed.) *Thackeray, Interviews and Recollections*, Vol. 1, The Macmillan Press LTD., 1983, p. 22.
- (9) *Letters*, Vol. I, pp. 96-97.
- (10) *The Uses of Adversity*, p. 124.
- (11) *The National Standard* は一八三三年一月に創刊、サッカレイは約四十篇の記事を載せ、三三年六月から同八月にかけてパリ通信員を務めた。Lewis Melville, *William Makepeace Thackeray*, Vol. II, John Lane, The Bodley Head, London, 1909, pp. 151-155 参照。
- (12) *Letters*, Vol. I, p. 207.
- (13) *Pendennis*, Vol. I, p. 359.
- (14) *Thackerayana*, Chatto & Windus, London, 1898, p. 126.

- (15) *The Uses of Adversity*, p. 170.
- (16) *Works*, Vol. XII, (*The Paris Sketch Book*) pp. 37-39.
- (17) *The Uses of Adversity*, p. 172.
- (18) *Letters*, Vol. I, p. 279.
- (19) サッカレイの当時のスケッチが *Letters*, Vol. I, Appendix II, "The Fitzgerald Album" に紹介されている。
- (20) カーマイクル・スミス夫妻は一八三五年にラークベアを去り、ロンドンのアルビオン街十八番地に移った。
- (21) *Letters*, Vol. I, pp. 303-304.
- (22) *Ibid.*, p. 264, p. 268.
- (23) *Works*, Vol. XI, (*Ballads and Tales*), p. 48.
- (24) *Works*, Vol. XI, (*The Adventures of Philip*, Vol. II) p. 53.
- (25) *The Yellowplush Correspondent* (Nov. 1837-Aug. 1838) Catherine (May, 1838-Feb. 1840) *A Shabby Gentle Story* (June-Oct. 1840) とりわけ「イエロープラッシュ・ペーパーズ」はロンドンの馬丁訛を模して少なからぬ読者の注目を浴びた。
- (26) *Letters*, Vol. I, p. 380.
- (27) *Works*, Vol. XIII, (*The History of Samuel Timmarsh and The Great Hogarty Diamond*) p. 403.
- (28) *Letters*, Vol. I, pp. 461-462.
- (29) *Ibid.*, pp. 463-464.
- (30) *Ibid.*, p. 479.
- (31) *Ibid.*, p. 478.
- (32) *Letters*, Vol. II, p. 3.
- (33) *Ibid.*, pp. 9-10.
- (34) *Ibid.*, p. 15. 上のあとイザベラを引取る決心に至ったいきなすが母宛のサッカレイ書翰に見える (*Letters*, Vol. II, p. 18.)。
- (35) *Ibid.*, p. 23. サッカレイはイザベラの全快を信じていたらしい点、注目すべきである。
- (36) *Ibid.*, p. 36.
- (37) *The Uses of Adversity*, p. 274.
- (38) *Letters*, Vol. I, p. 304.
- (39) *The Uses of Adversity*, p. 281.
- (40) *Letters*, Vol. II, p. 43.
- (41) オランダ・ベルギー地方の旅の印象については *Letters*, Vol. II, Appendix IX に断章四篇が紹介されている。
- (42) この間イザベラに宛てた手紙は四通あり、娘宛の最初の手紙はアンが六歳に近い時期のもの (*Letters*, Vol. II, pp. 101-102) である。
- (43) *Letters*, Vol. II, p. 125.
- (44) 一八四五年十月にイザベラを引取り、ロンドン南部の地に住まわせる。付添人はベイクウェル夫人。二人の娘は四六年秋にパリからロンドンへ移って、以後、父親と共に住む。
- (45) *Thackeray, Interviews and Recollections*, Vol. I, pp. 80-81.